男か女か？

有坂 広一

用もないのに都心の公園にやって来た。小倉洋一はベンチに座って、十数メートルほど先の寒々とした噴水の水しぶきを眺めていた。今にも雨か雪でも降り出しそうな曇り空である。そのうち不機嫌になってきた。気候のせいではない。あの侮辱的な言葉が蘇ったのだ。先日のこと、アルバイトの某女が、経理課の大谷菊江がこんなことを言ったというのである。

「小倉さんって得体が知れないわ。あの髪の毛は何さ。長くって女みたいだし…」

「得体が知れないとはなんだ、許さんぞ」

「私が言ったんじゃないわ」

「お前も同罪だ」

会社は二十名そこそこの軽印刷業で、小倉は入社して二カ月しか経っていない。その会社を選んだのは、別に理由はない。ただ面接だけで簡単に入れたからだ。実は、彼は二年続けて大学入試に失敗したので仕方なく就職せざるを得なかった。鬱屈を持て余し、職場の同僚にうまく溶け込めずに孤立している。そういうところが人に誤解を与えているのかもしれない。それにしても、こんな居心地の悪い職場はない。

経理課の責任者大谷菊江は四十代で、社内でははなはだ評判がいい。機知にとんだ聡明な人柄だとか、女手一つで一人娘を育てているしっかり者だとか、大抵の社員から尊敬の目で見られている。小倉は自分とは別世界の女としか思っていない。そんなわけで、彼の菊江への態度はますます不愛想になり、話しかけることもなくなった。むろん、そんなことくらいで腹の虫が収まったわけではない。いつか抗議するなりして認識を改めさせるつもりでいる。鬱々としていると、足音がして彼と同じベンチの端に人が座った。そう言えば先ほどからベンチのかたわらに自転車が立てかけてある。そのうち隣人が気になりだした。その若い人が男なのか女なのか、外観からは識別できないのだ。正面から見る機会を逸した。目の端でとらえた限りではヘアスタイルは何型というのか男女どちらともとれる短めである。眉は濃くて、切れ長の目をしている。服装はフードのついたスキーウェアにジーパン姿。残念

ながら胸のふくらみは見えない。そして無化粧。男のようであり、女のようでもある。一体どちらなんだろう、小倉はますます向きになりながら思わず話しかけてしまった。
「あのう、スポーツでもしているんですか」
「ええ、山登りをしています」
「へえー、凄いですね」
「たいしたことないですよ」
「いい趣味があっていいなあ」と小倉が感心したら、彼女はさらに、自分には目標があると言う。将来、ヒマラヤの山地を歩くとかで、それをヒマラヤ・トレッキングと言うそうだ。なんだか遠大なプランみたいである。絶対に実現させるつもりだと強調した。彼は山のことはほとんど知らないけれど、共感するものがあった。彼女は今度は小倉に尋ねた。
「さっきは何か考え事をしていたみたいね」
「会社の嫌な女のことをね」
「まあ……」
「その女はね、僕を馬鹿にしたんだ」
小倉は菊江の口にしたことを伝えた。
「僕はその女が憎いよ」
「私だって、変わり者の山女ぐらいにしか思われていないわ。でも平気よ」
「その女は、他人をどれだけ傷つけているのか、分かってないんだ。最低の女だよ」
「忘れなさいよ」
それに越したことはない。でも打ち明けて気が楽になった。かなり清々しい気分になった。時間がきたので二人して立ち上がった。お互いに手製の名刺を交換して、よろしくと改めて挨拶した。小倉は帰りながら「彼女の名前は江藤恵子と言うんだな」と呟きながらニヤニヤした。
それから、お互いに何度も電話をかけ合った。
「女の人とは、どうなったの」と恵子が聞いた。
「そのうち、こらしめてやるさ」
「でも、過激にならない方がいいわよ」
「大丈夫だよ」
「解決するといいわね」
それよりも恵子とのデートが楽しみだった。彼女も心待ちにしているようである。

土曜日で会社は半日で終った。いつも中央線の四谷駅を利用しているのだが、その日はバスである。彼はこれからM町駅で恵子と落ち合って副都心の繁華街に

行く予定だった。バス停で待っていると、どういうわけか大谷菊江もこちらに向かって来る。彼女もどうやらバスでどこかへ行くようである。同じバスに乗り合わせたくないものだと思っていると、M町方面のバスが来た。小倉は菊江が小走りに駆けて来るのを尻目にバスに乗り込み、空いている最後部の真ん中あたりの座席に座った。敵を撒いたつもりだが彼女も後から来て、

「ここに座らせてもらっていいかしら」

遠慮深げに腰を下ろした。菊江はこの頃の小倉を気にしているに違いない。何しろ彼の菊江への態度はあれ以来、一変したのだから。何か言ってやりたいが、なかなかタイミングがつかめないでいる。もたもたしているうちに一ヶ月が過ぎた。彼女はぶっすらしている小倉に機嫌を取るように話しかけてきた。

「私、スーパーで買物をするの」

小倉はすぐに返事をしなかった。

「小倉さんはデートじゃないの」

菊江はおもねるように尋ねるのだが、「さあね」と小倉はそっけない。

「あなたくらいの若さだったら、恋人がいてもおかしくないものね」

「そりゃ、僕だって普通の人間だから恋人はいますよ」

「ほら、やっぱりいるのね」

「女性を好きになったり、恋をしたりするのは当然でしょう」

「若い人っていいな」

菊江は小倉に感心したような顔をしてみせた。小倉は菊江が芝居がかった優し気な口調で話すのが煩わしかった。しかし、ヒョンなことで菊江の関心がそれた。どこかの停留所から乗った客の中に、男装の女がいて、小倉たちと同じ最後部の座席に座った。菊江はその女が珍しいのか、もっぱらその方に注意を向けた。男装は髪を七三に分け、薄地の渋い焦げ茶のスーツにネクタイを締めた中年である。水商売をしている人のように思える。崩れたところがなく、それどころか、そこはかとない気品が漂っている。菊江はさりげなく盗み見していたが、だんだんと興味が強くなってきたのか、バスが揺れると、揺れのせいにして身を乗り出した。失礼ではないかと小倉は気を揉んだ。それで、見るのをやめさせようとして、彼は菊江の方に体を向けて、咳払いをしたり睨みつけたりした。だがなんの効果もない。彼女の無遠慮なふるまいには異端者と言わぬばかりの蔑みが感じられた。バスが一つか二つ手前の停

留所に近づく頃、男装は降りる支度を始めた。そして立ち上がると、彼女は小倉たちの方に歩み寄って来たのだ。何か起こりそうな気がして、小倉の胸が高鳴った。男装は菊江に向って怜悧な視線を向けた。そして、

「あなた、人の様子をじろじろ見つめたりするのは礼儀に反しますよ。体を乗り出してまで見ることはないでしょう。不愉快ですわ」

と、抗議したのだった。凛とした声が鳴り響いて、乗客たちは後ろを振り向いた。眼鏡をかけた菊江の色白の顔は羞恥のあまりポッと染まった。かたわらの小倉もいたたまれなくて顔を伏せた。やがて男装はすっと立ち去った。小倉は撫肩の華奢な後ろ姿に目をやり、感動すら覚えた。呆然としていた菊江は我に返ってこう言った。

「私、そんな失礼なことをしたかしら」

「あの人の言う通りです」

「もしそうだとしたら、私いけないことをしたのね」

「大谷さんは人を偏見の目で見る性癖があるんですよ」

「そんなの、ないわよ。あれば直すわ」

菊江は消え入りそうな声で言い訳をした。バスがM町前に近づくと二人は降りて、それぞれ別の方に向かった。M町駅前に恵子は待っていた。小倉は笑みを浮かべながら近づくと抱擁した。恵子は笑い少し表情を歪めた。

「そんなに強く抱かないで」

「ごめん、ごめん」小倉は冗談めいた口調。「君の髪の毛、大分伸びたね。最初に会った時、男か女か分からなかったけど」

「失礼ね」

「でも、今はすっかり女性に見えるよ。綺麗なね」

「無理しなくていいわよ」

「いや、本心だよ」

二人は声を立てて笑い合った。

初稿　慧一号　一九八六年　六月号　八月発行

二稿　みなせ八二号　二〇一九年五月発行